

研究報告

子どもと読書 子どもの読書生活指導の実際を中心として

平成16年度学部・附属共同研究会「言語と生活」分科会
岩手大学国語教育講座 藤井知弘 菊地悟
附属小学校 近藤澄江 菅原るみ子

1. 問題関心

昨今の「学力低下」を巡る論議とともに問題視されていることに「活字離れ」「読書離れ」ということがあげられる。しかし、「活字離れ」はここ最近において問題とされてきたわけではなく、毎日新聞社、全国学校図書館協議会主催の「学校読書調査」（後掲）においても、小学生の不読率は一定率を示し、良くもなければ極端に悪いという結果にもなっていない。

「子どもと環境」という点を、「社会文化的アプローチ」によって解釈すると以下のような指摘をすることができる。

- 子どもはある社会文化の共同体の中で生活している。その共同体の中で、重要と考えられている活動に、大人に導かれながら参加し、周りの状況に支えられながら自立的にその活動ができるようになっていく。
- 環境は与えられるだけのものではなく、大人と子ども、活動の参加者が共に構成していくものである。
- 環境には、直接的な環境だけではなく、間接的な環境もある。
 - 親や教師のネットワークなど、子どもの経験や行動に影響を及ぼしたり影響したりするもの
 - 学校制度など文化全体のレベルや、価値や信念などのレベル

特に「読書」においては、こうした環境の影響が大きいのではないかというのが、問題関心の発端である。そこで、附属小の児童の読書生活の実態を手がかりに、読書を巡る子どもの問題を探ることとして本研究では以下の主題を設定した。

1. 子どもたちの読書を巡って状況はどうなっているか
2. 附属小の子どもたちの読書生活の実態はどのようなものか
3. 附属小における読書（読むこと）への取り組みの実際はどのように行われているか

2. 子どもの読むことを巡る状況

2-1 子どもを巡る読書の状況

子どもの読書状況については、各種調査が実施されている。代表的な「学校読書調査」においては不読率の変化について継続調査を行っている。

■資料1：「学校読書調査」にみる不読者率の推移（5月1ヶ月に1冊も本を読まなかった児童・生徒の割合） 2002年版読書世論調査（第47回学校読書調査）毎日新聞社

		H1	H5	H9	H13
小学生	冊数	6.3冊	6.4	6.3	6.2
	不読率	10.5%	12.1	15.0	10.5
中学生	冊数	2.1	1.7	1.6	2.1
	不読率	41.9%	51.4	55.3	43.7
高校生	冊数	1.3	1.3	1.0	1.1
	不読率	57.0%	60.8	69.8	67.0

小・中・高ともに、その割合は変化が大きくみられないが、高校生の不読率が際だって高いことがわかる。校種があがるごと読書から離れていく傾向にあることが顕著となっている。近年のデータでは、「朝の読書」の効果からか、不読率が数%で改善していることがみられる。以下、規模の大きな調査として[資料2] [資料3]をあげる。

■資料2：文化庁・国語世論調査（H15.6/19）

16歳以上の成人男女3千人 「1ヶ月に何冊の本を読むか」

[1～10冊 58.1%] [全く読まない 37.6%]

(四国59.8% 東北48.5%) (関東地方28.6%) (政令指定都市31.1%)

■資料3：H6「読書に関する調査報告書」全国学校図書館協議会（文部省委嘱）

47都道府県 児童生徒（小3. 小5. 中2. 高2）6406人

教師 4084人 保護者4238人 対象

○児童生徒の読書量 小（8.0冊） 中（2.1冊） 高（1.9冊）

○読書が好き 小（76.5%） 中（69.2%） 高（73.8%）

○雑誌の読書量 小（5.9冊） 中（5.2冊） 高（5.3冊）

マンガの読書量 小（10.9冊） 中（10.9冊） 高（7.9冊）

○読書状況の認識 「読まなくなった」は小→中→高と認識度が高くなる結果

○本を読まない理由の保護者の認識

1 「TVやTVゲームに熱中している」小（56.3%） 中（50.2%）

2 「本を読むことが苦手」 小（50.7%） 中（47.2%）

○帰宅後の過ごし方

小 1位「宿題、勉強をした」58.5% 2位「テレビ、ビデオを見た」51.0%

中・高 1位「テレビ、ビデオを見た」（中 72.6%）（高 66.8%）

○学校図書館の利用（2月1ヶ月間の利用）

1回以上行った 小（79.6%） 中（49.2%） 高（44.2%）

またPISA調査の際に同時に行われた意識調査の結果からは、異なる二つの状況がみられる。一つは、読書に対する良い結果と悪い結果が同居するといった結果となっている。

■資料4：読書に関する意識 PISA調査 (OECD 2000)

ワースト1の項目	日本	OECD平均
○趣味としての読書をしない	55.0%	31.7
○本を最後まで読み終えるのは困難	17.0%	9.0
○読書の種類 フィクションを読まない	30.0%	25.8
○図書館の利用頻度 利用しない	52.2%	41.0
よい結果の項目		
○本の内容を人に話すのが好き	17.0% (1位)	6.0
○本屋や図書館に行くのが楽しい	29.0% (1位)	12.0
○読書は時間の無駄だ (そう思う率の低さ)	7.0% (2位)	8.0
◎読書への良好な関心や態度を示す指標	0.09 (2位)	0.00

順位は [イギリス フランス アメリカ 韓国 フィンランド アイルランド オーストラリア イタリア カナダ ドイツ ニュージーランド 日本] から筆者がつけた。

この結果からは、「読む子は読んで読書の楽しさを実感しているが、読まない子は読まないし、読書に親しむ体験もしていない」ということがわかる。つまり「読書の階層化現象」といえる。PISA調査では、「読書への取り組み」指標と総合読解力得点との関係とでは、明らかな正の相関関係があることも明らかになっている。日本では、指標値の最上位25%の生徒群の平均得点は、最下位25%群よりも63点高い結果となっている。このことは日本のみならず、OECD全体においても両者の差は89点という結果になっている。読書が読解力に大きな影響を及ぼしているのである。

2-2 読書を巡る社会的な状況

ここ十年の間においても、児童・生徒の読書離れという現象を踏まえ、行政サイドにおいても様々な対応がなされている。国の施策として主なものをあげてみると次のようなものがあげられる。

- 平成10年6月30日「新しい時代を拓く心を育てるために 一次世代を育てる心を失う危機」
中央教育審議会答申 → 子どもに読書を促す工夫をしよう
- 平成11年6月9日「学習の成果を幅広く生かす 生涯学習の成果を生かすための方策について」
中央教育審議会答申 → 活動の場づくり学校支援ボランティアの例としての学校図書館運営
- 平成11年8月 平成12年を「子ども読書年」とする衆参両院の決議
→ 読書の持つ計り知れない価値を認識して子どもの読書活動を国をあげて支援する。
- 平成12年1月 「国際子ども図書館」設立：国立国会図書館の支部図書館（上野）
- 平成12年12月 「教育改革国民会議報告書」：「読み、書き、話すなどことばの教育」重視の提言
- 平成13年12月 「子どもの読書活動の推進に関する法律」

○平成14年1月 「確かな学力の向上のための2002アピール『学びのすすめ』

→ 一定の冊数の読書／ 朝の読書など始業前学習／ 子どもたちが読書に親しむ機会を充実し、読書の習慣を身につけるよう学校図書館資料の計画的な整備を図る／ 学校における読書活動の取組状況

○平成14年2月21日 「中央教育審議会答申」

→ 土・日曜日における学校図書館の開放を積極的に進める必要がある。
国語教育や読書指導の重視 国語教育を格段に充実する必要がある。その際、名文や詩歌等の素読や暗唱、朗読など、ことばのリズムや美しさを体覚えさせるような指導の良さを見直すべきである。また、近年多くの学校に広がっている「朝の10分間読書」は、読書の楽しみを広げていくことが期待される。併せて、司書教諭の配置やボランティアの活用、情報機器の整備などを通じ、図書館の総合的な機能の充実に取り組んでいく必要がある。

○平成14年8月 閣議決定「子ども読書活動推進基本計画」

○平成14年度 学校図書館整備第2次5カ年計画の開始

○平成14/15年度 生きる力をはぐくむ読書活動推進事業 全国17地域の指定（岩手はナシ）

○平成15年度 学校図書館活用フォーラム実施（全国3ブロックによる実施）

○平成13～15年度学校図書館資源共有型モデル地域事業（岩手は東磐井地域6町村）

一方、岩手県においても推進体制の整備として平成16年度の状況をみると、「岩手県子どもの読書活動推進委員会」の設立、「教育振興運動リーダー研修会」の実施、「学校図書館担当者研修会」の県内4地区における実施などが行われた。一方、民間団体や市民レベルにおける活動を推進させるために、読書ボランティアの育成も広く行われるようになってきている。

「読み聞かせキャラバン」は県内受託団体6団体が展開をし、県立青少年の家における「中高生のための読書ボランティア研修会」の実施、また県内各地において「読書ボランティア研修会」の実施などの取組が見られる。

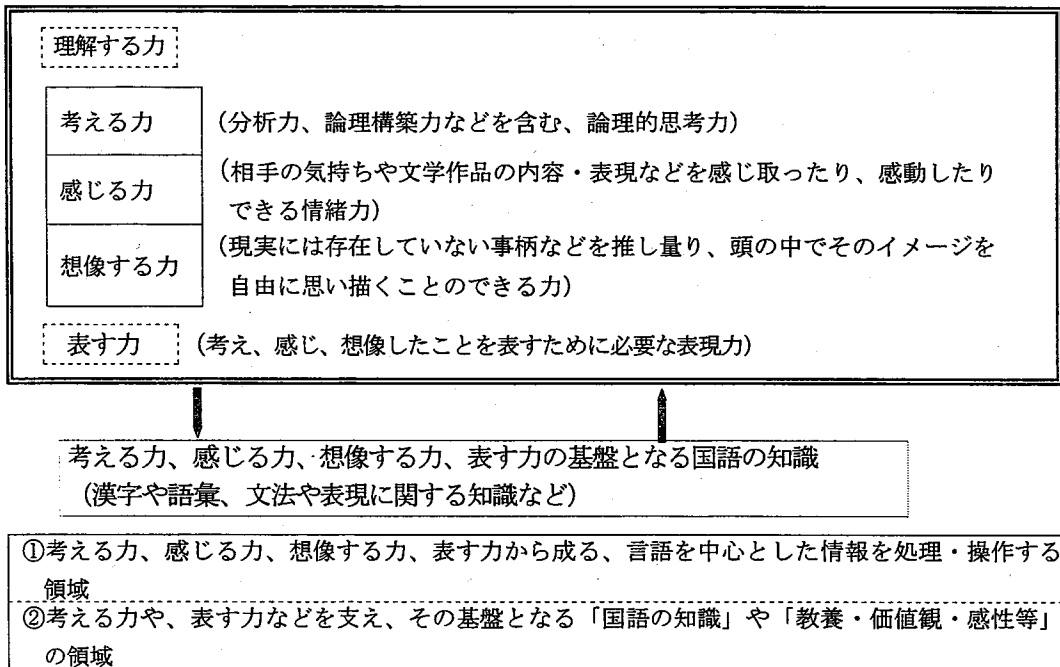
このように、読書に関しては、昨今の日本語ブームも相成って今までないほど行政サイドの取組としても推進する方向性が示されている。こうした流れは、読書がもたらす価値を改めて捉え直した上で、学校教育のみならず、社会教育を含みこんで読書生活の充実を図ることに重点が置かれている。

2-3 つけたい力としての「国語力」としての「読解力」

児童・生徒の読書離れの状況、日本語の乱れという状況を踏まえ、2004年、文化庁の文化審議会は「これからの時代に求められる国語力」を答申することとなる。

答申において示された図は以下に示す通りであるが、広く言語生活全体をさして「理解する力」と「表す力」の二つと大きくとらえ、読書はこの両者の力を培い、基盤となる知識をもたらすものとして重要視されている。

【資料5】＜国語力の構造＞



ちょうど時を同じく公表されたPISA2003の結果からも読解力の低下が指摘されたこともあって、文科省もこの国語力とPISA型の読解力を勘案し、「読解力向上プログラム」を平成17年12月に出すに至っている。この中で文科省や教育委員会の取組の戦略の中にも「読書活動の支援充実」が掲げられており、平成14年度からの「学校図書館図書整備五カ年計画」のように、学校図書館の充実をあげている。

ここでは、PISA型読解力が国語教育について与えた影響などについて述べる紙幅の余裕はないが、テキストの内容を理解し、評価することや、建設的な批判を伴う読みを行うこと、幅広い様々なテキストを読む機会を増やすことが求められている。

以上述べてきたように、子どもたちの読書離れという大きな傾向を打破するために、読書を学校教育のカリキュラム全体に機能するもの「reading across the curriculum」としてとらえるだけではなく、言語生活全体に渡るものとしてとらえ、そのための方策が模索されていることが明らかになった。

3. アンケート結果の考察

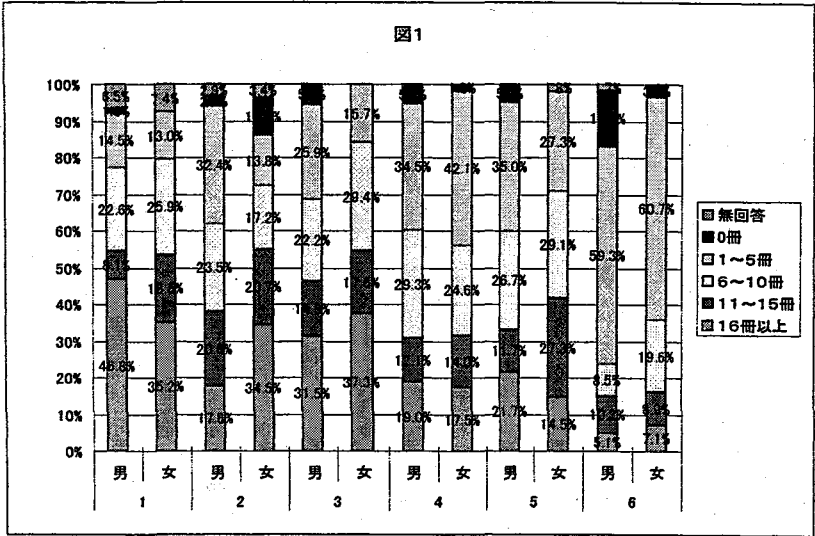
児童の読書生活の実態を、附属小学校においてアンケート調査を行った。特に目に付いた結果のみを取りあげてみる。要因などの具体的な考察は、今回は行っていない。

実施：平成15年秋

対象：附属小学校全児童

(1) 1か月に読んだ冊数【図1】

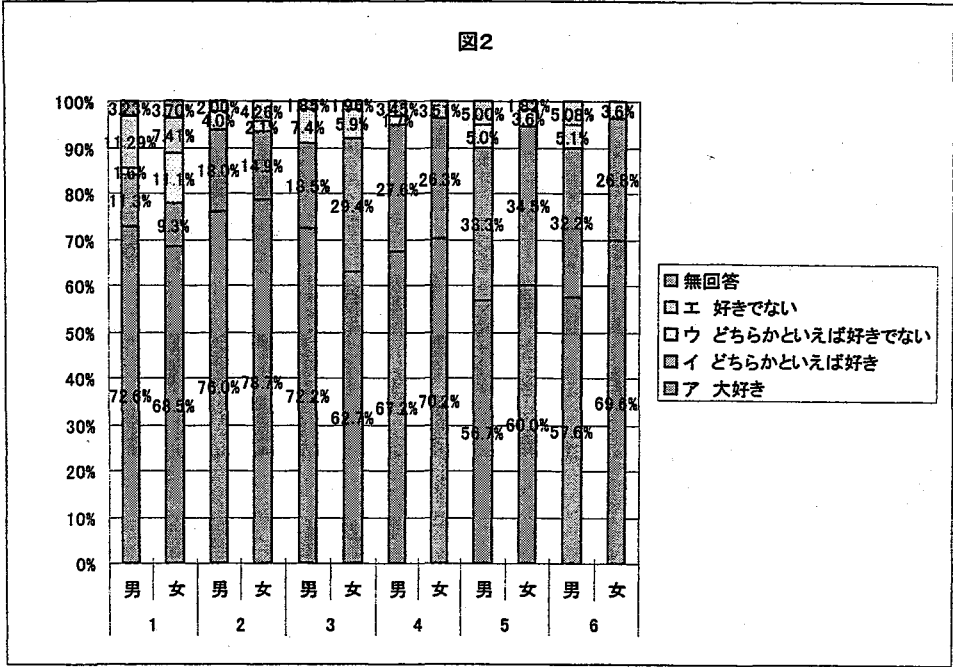
学年による差を見るために、複式学級は除外した(以下(4)、(11)、(12)を除き同



様)。また、先行調査を行った2年ふじ組のデータは、選択肢に異同が生じたため割愛した。ちなみに、2年ふじ組でのデータ分布は、16冊以上が12人、10~15冊が21人、2冊が5人、であり、1冊以下は皆無であった。単純に冊数で見ると、低学年の方に多読の傾向がある一方、6年生では

5冊以下しか読んでいないという回答が過半数である。

(2) 本が好きか【図2】

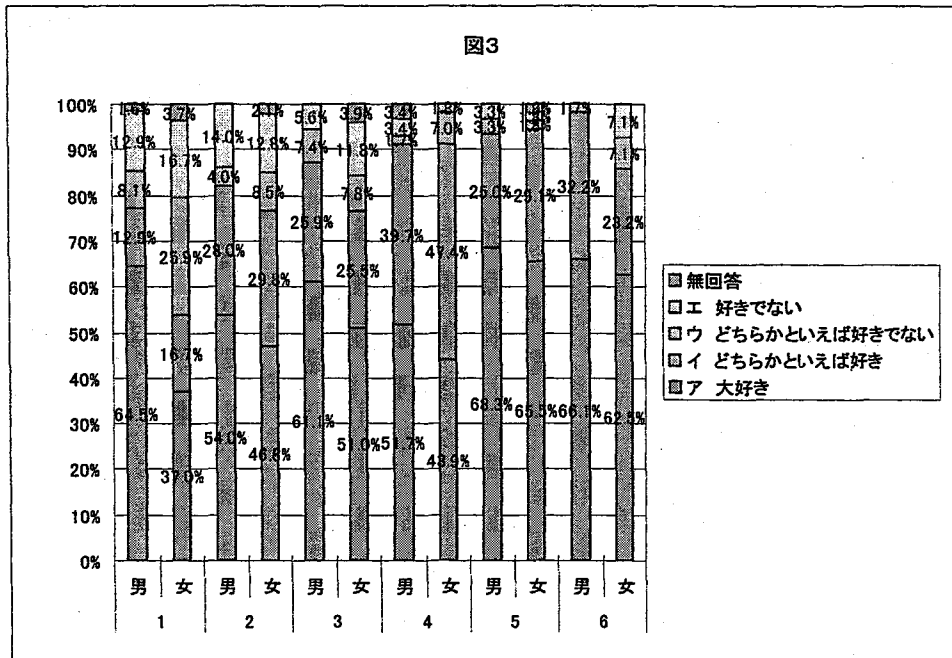


附属小の児童は全般的に本好きのようである。ただし高学年では若干「大好き」が減り、「どちらか」と好きが増える傾向が見られる。

(3) 雑誌・マンガが好きか【図3】

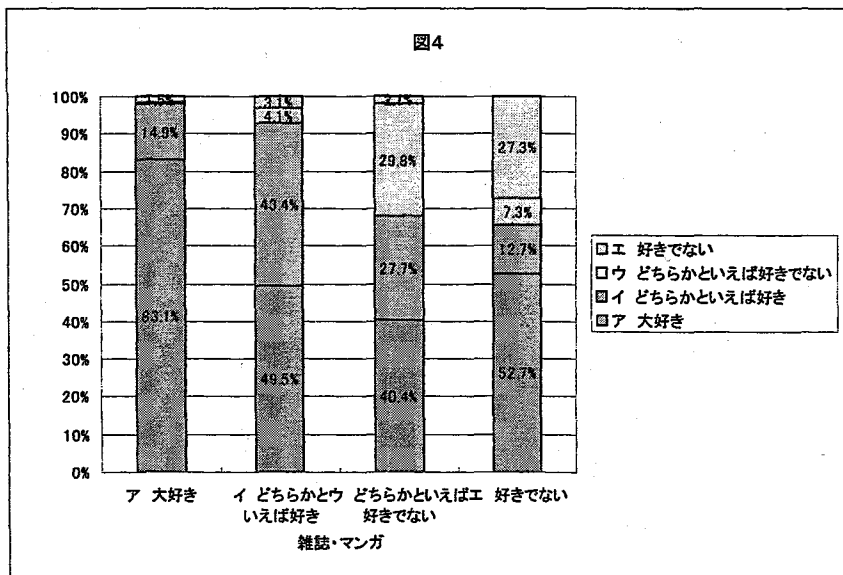
低学年から中学年では否定的な回答がかなり見られた。特に1年女子では40%に達してい

る。一方、高学年では本よりも雑誌・マンガが好きという傾向も見られる。



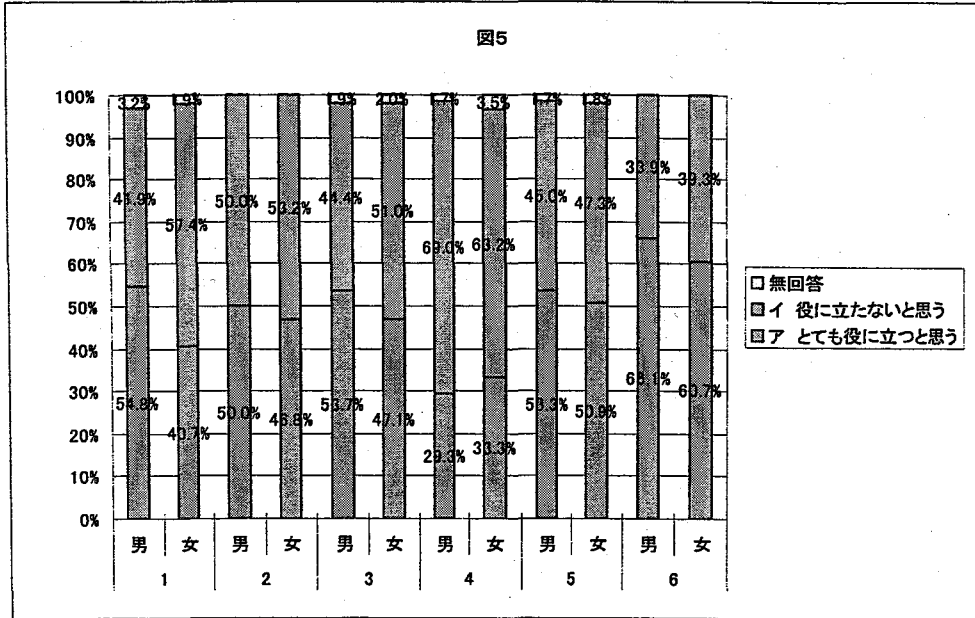
(4) 設問 (2) と (3) のクロス集計【図4】

雑誌・マンガが好きなお子さんは本も好きなお子さんである。しかし、雑誌・マンガは好きでないが本は好きといったお子さんも多いことがわかる。



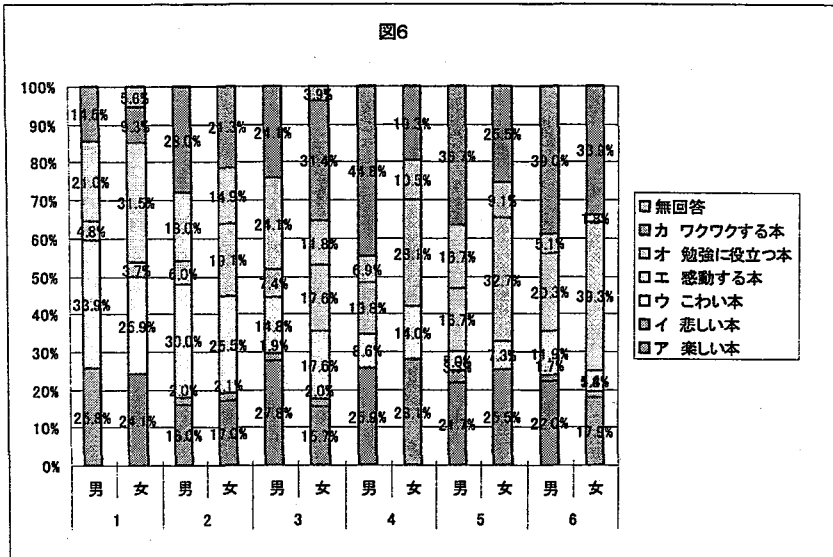
(5) 雑誌・マンガは役に立つと思うか【図5】

4年生が最も否定的で、最も肯定的なのが6年生である。学習マンガなどを想定しているのかもしれない。

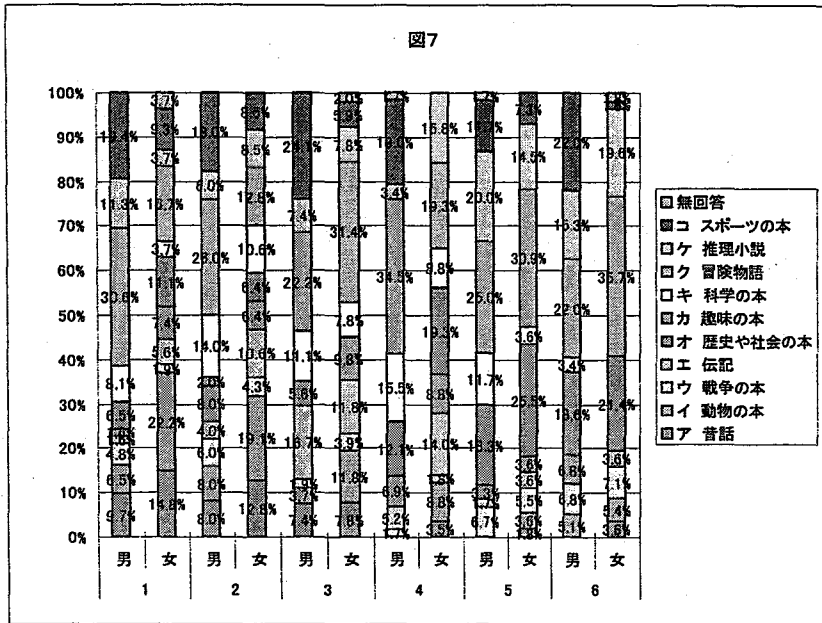


(6) どんな傾向の本が読みたいか【図6】

最も回答が多かったものを列挙すると、1年は男子が「こわい本」、女子が「勉強に役立つ本」、2年は男女とも「こわい本」、3年は男子が「楽しい本」、女子が「ワクワクする本」、4年は男子が「ワクワクする本」、女子が「楽しい本」、5年は男子が「ワクワクする本」、女子が「楽しい本」、6年は男子が「ワクワクする本」、女子が「楽しい本」となる。学年・男女による傾向差が著しい。



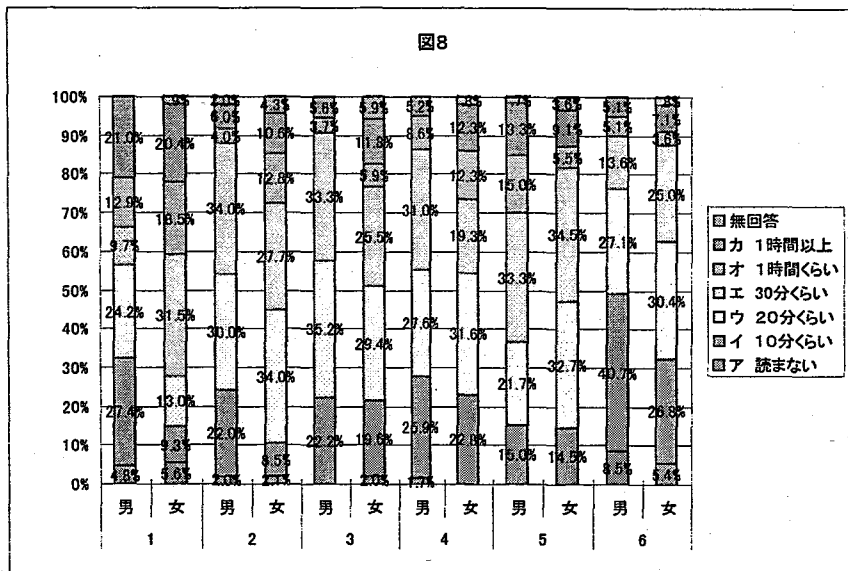
(7) どんなジャンルの本が読みたいか【図7】



「冒険物語」が、1年の男子、2年の男子、3年の女子、4年の男女（女子は「趣味の本」と同率）、5年の男女、6年の男女（男子は「スポーツの本」と同率）と全学年で高い支持を集めている。その他、1、2年の女子は「動物の本」、3年男子は「スポーツの本」の人気の高い。

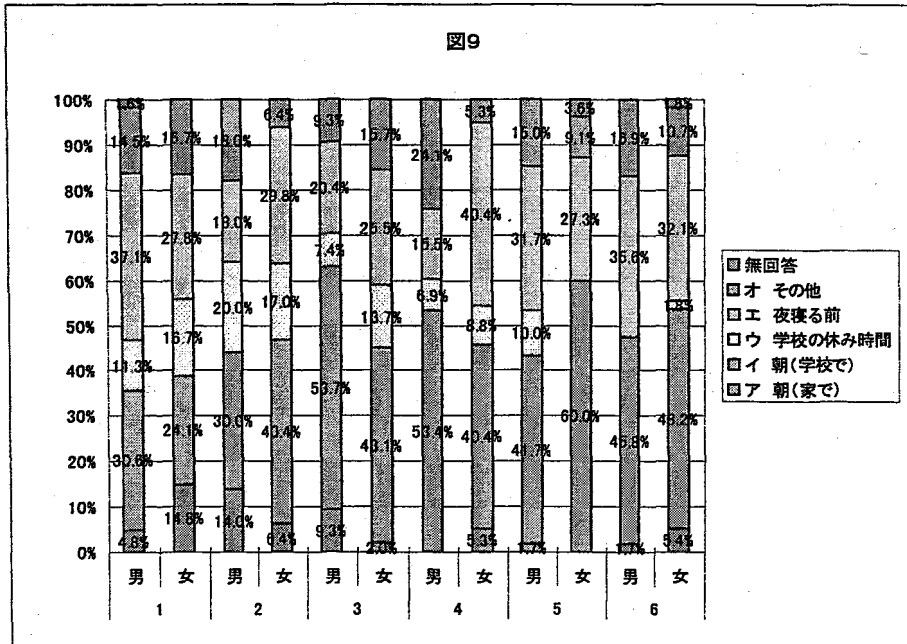
(8) 平日の読書時間【図8】

「1時間くらい」「1時間以上」という回答は1年生が最も多かった。2～5年は「20分くらい」「30分くらい」が主流である。6年生になると、「読まない」「10分くらい」「20分くらい」で男子の7割、女子の6割を占める。



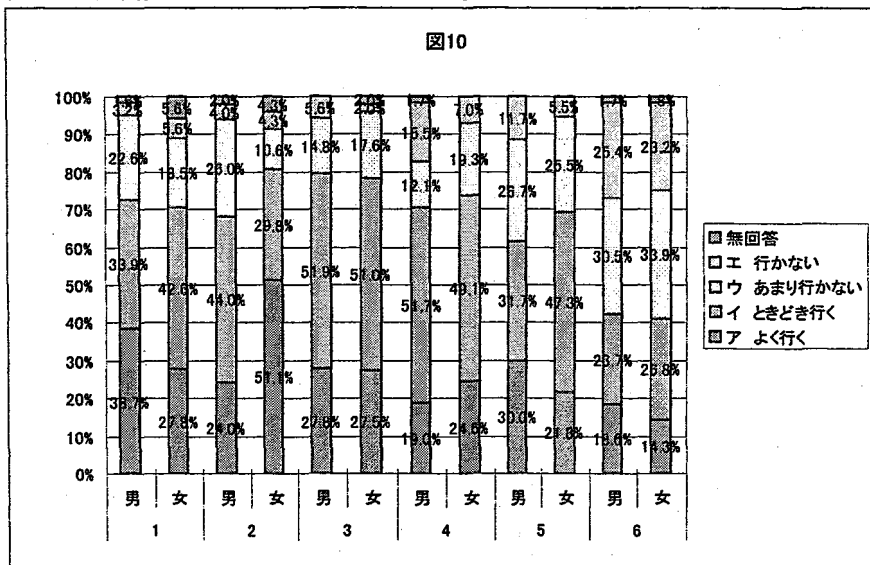
(9) 平日のいつ読書するか【図9】

1年生で「夜寝る前」が最多だった以外は、各学年とも「朝(学校で)」が多い。



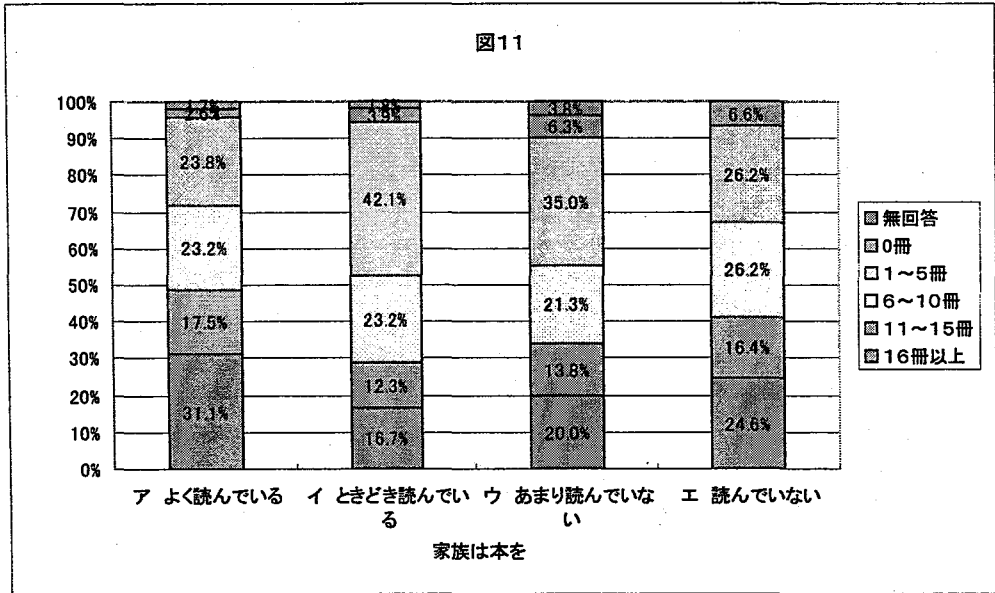
(10) 学校図書館に行くか【図10】

「よく行く」という回答は2年の女子が最も多かった。5年生までは「ときどき行く」を含め6~8割が学校図書館を利用しているのであるが、6年生になると学校図書館を利用していない児童が過半数に達していることがわかる。



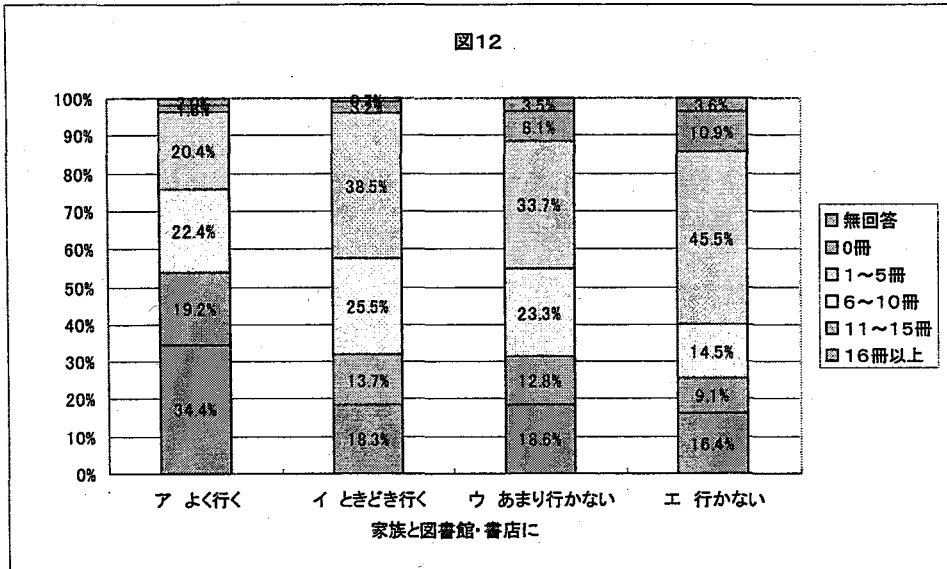
(11) 家族の読書と冊数【図11】

家族がよく読んでいる児童は、明らかに読書量が多いと言える。半面、家族が読んでいないからといって、児童の読書量が少ないとは限らないようである。



(12) 家族と図書館・書店に行くかと冊数【図12】

「よく行く」と答えた児童の読書量は明らかに多い。行く頻度が少なくなるに従って読書量の少ない児童が増える傾向が見られる。



附属小の児童は、概して読書をよくしている実態が明らかになった。しかし、細かく見てみると、学校での読書がその比重として多く、高学年ほど学校図書館も利用頻度が落ちてくるといった傾向もうかがえる。また親の読書への関わりが児童に影響を与えていることも大きいといえる。図書館や書店へ一緒に行くという直接的な行動が、児童の読書に対する好意度に結びつくことは予想されることである。こうした実態結果を、保護者にも示すことによって、保護者をも取り込んだ読書指導の全体計画の策定が今後の課題となってくるといえる。

4. 附属小学校における取組：実践の具体

読み聞かせと子ども：近藤澄江実践・附属小学校 2学年ふじ組 男子19名 女子18名

4-1 読書に目を向けさせるための工夫

読書の基本は自分から主体的に読んでいくことであるので、子どもの読むことへの興味・関心や意欲が大事になってくる。そのためには、読書は楽しいものであるということを体験させなければならない。そのためには、学級の中に次のような工夫を取り入れた。

①環境作り

本を読みたいときにいつでも本を読むことができるように、一人一人に本を入れる手提げ袋（本バッグ）を用意させ、机の横に掛けさせた。この手提げ袋の中に、学校図書館から借りた本や自宅から持って来た本などを常時入れ、読める時間にすぐ取り出して読むことができるようにした。

教室の壁の一角に読書に関わる場所を設置した。そこに、読書案内、子どもの読書カード、子どもの書いた読書案内、絵本の表紙や帯、書き込み（教師がテーマを与えて、自由に子どもが書き込みして答える）など、読書への興味や関心を喚起しようとした。

②多くの本を知らせる

子どもが選ぶ本をみていると、子どもによって読む本の分野が固定化されていた。恐竜の図鑑を読む子どもは恐竜の図鑑を、魚が好きな子どもは魚が書いてある本を、伝記を読む子どもはまた伝記を、その分野ばかり読む子どもが多い。

そこで、教科書で扱った物語や説明的文章に関連した本を紹介したり、同じ作者の他の本を紹介したり、必読図書を設けたり、異なった分野の本へも目を向けさせ、手に取らせるようにした。

③読書発表会を開く

自分の読んだ本を紹介したり、読んだ本の感想を発表したり、読書クイズをすることによって、読書への関心を高めようとした。

④図書館へ誘う

「どんな本がどこに並んでいるのか。」「実際にこんな楽しい本がここにある。」といったような本を自分の手で探したり発見したりしながら、本を選ぶ意欲付けになることを願って、子どもと一緒に図書館に足を運んだ。子どもが、図書館に置かれている本の多さや種類の多さに気付き、活用できるように声をかけていった。また、しばらくの間、図書館を身近な情報源として足繁く通うように、学級の中に学級文庫を置かないことにした。

⑤読み聞かせをする

教室での読み聞かせは、日常的な読み聞かせと非日常的な読み聞かせがある。前者は、朝読書や給食時間、帰りの時間にほぼ定期的に行う読み聞かせである。後者は、国語科の時間

に教科書教材と関連させて単元の初めや発展読書として行う読み聞かせや、学級裁量の時間を使って特設として行う読み聞かせである。日常的な読み聞かせは、時間的に10分から15分とわずかな時間であるが、担任が頃合いを調節できて時間を確保できることや手軽であるという点が利点として挙げられる。

4-2 日常的な読み聞かせの実践から

①読み聞かせの目標

- ① 読書の面白さや楽しさを味わわせる。
- ② 絵本に浸らせる。
- ③ 心を開放させる。
- ④ 子どもの間に共有する時間を設け、人間関係を豊かにする。

②時間や形態

- 1) 担任による読み聞かせ：朝読書（8:20~8:30）、帰りの会など
- 2) 保護者による読み聞かせ：学級裁量の時間を使った（各1時間）

③読み聞かせに選んだ本

読み聞かせ用の本は、限られた時間の中で声に出して読むことが前提となるため、文字数を10分から15分間（1分間400~600字を読むとする）で読むことができるものとした。また、文字数が多いものは、続き物として何日かに分けて読み聞かせをした。

子どもに読んだ本の中から子どもに人気のあった本や反応の高い本を以下に挙げる。

【2004年度読み聞かせの本 2学年児童対象（抜粋）】

	題 名	作 者	反 応
四月	ともだちや	内田麟太郎	◎
	こぶんじゃないよともだちだよ	後藤竜二	◎
	オバケとモモちゃん	松谷みよこ	◎
	ねずみくんのチョッキ 他	なかえよしお	◎
	いやいやえん	中川季枝子	◎
五月	おかあさんおめでとう	神沢利子	◎
	ぶたぶたくんのおかいもの	土方久功	○
	ぐりとぐら 他	中川季枝子	◎
	あおくんときいろちゃん 他	L・レオニ	◎
	おおかみと七ひきのこやぎ	F・ホフマン	◎
六月	小さなきかんしゃ	グリーン	◎
	めつきらもつきらどおんどん	長谷川摂子	◎
	にじいろのさかな他	M・フィスター	◎
	あおいめくろいめちやいろのめ	加古里子	◎
	からすのぱんやさん他	加古里子	◎
七月	しろいうさぎとくろいうさぎ	G・ウィリアムズ	◎
	たなばた	岩崎京子	◎

月	だるまちゃんとかんぐちゃん他	加古里子	◎
	きかんぼうのあおいねこ他	E・ブライヤー	◎
	だんまりこおろぎ他	E・カール	◎
八月	ねえ、どれがいい?	G・パーミンガム	◎
	あなにおちたぞう	寺村輝男	◎
	100万回生きたねこ	佐野洋子	◎
	かいじゅうたちのいるところ	センダック	◎
	やっぱりおおかみ	ささきまき	◎
九月	あらしのよるに	木村裕一	◎
	エンソくんきしゃにのる	スズキコージ	◎
	かばくん	岸田衿子	◎
	まあちゃんのながいかみ	たかどのほうこ	◎
	あさえとちいさないもうと	筒井頼子	◎
十月	王さまと九人のきょうだい	君島久子	◎
	ジェインのもうふ	ミラー	◎
	しょうぼうじどうしゃじぶた	渡辺茂男	◎
	どうぶつえんのおいしゃさん	増井光子	◎
	ふたりはいつも他	A・ローベル	◎
十一月	いそがしいよる	さとうわきこ	◎
	どろんこハリー	J・ジオン	◎
	ポケットの中	森山京	○
	わらしべ長者	西郷竹彦	◎
	空とぶテーブル	佐々木マキ	◎
十二月	おばあさんのひこうき	村上勉	◎
	おおきなきがほしい	村上勉	◎
	ふゆのよるのおくりもの	芭蕉みどり	◎
月	クルミわりにんぎょう	J・リチャードソン	◎
	急行「北極号」	V・オーズバーグ	◎

(反応の◎は、読後に子どもたちが図書館から再び借りたり日記に感想を書いたりしていたもの)

月別の選書に当たって配慮した点は、次の点である。

1) 学年始め長期休業明けには友達に関わる本

「ともだちや」シリーズや「となりのせきのますだくん」(武田美穂作)「ケンカオニ」(浦安陽子作)「たろうのともだち」(村山桂子作)などの読み聞かせを4月に行った。

2) 季節感のある本

7月に「たなばた」、8月に「ほたるホテル」(K・G・ストーン)「ぐりとぐらのかいすいよく」、クリスマスに関連して12月に「ゆきとトナカイのうた」(B・ハグブリング作)、「あのね、サンタの国ではね・・・」(黒井健作)、「世界一すてきなおくりもの」(薫くみこ作)、「クリスマスのつぼ」(J・ケント作)、「サンタクロースとまほうのたいこ」(M・クンナス作)などを読み聞かせをした。

3) 国語科年間指導計画の教科書教材に関連した本

「スイミー」(6月教材)に関連してレオ・レオニの本のシリーズの読み聞かせをした。
 「お手紙」(10月教材)に関連してアーノルド・ローベルの本のシリーズを読み聞かせた。
 「三まいのおふだ」(11月教材)に関連して民話「やまんばのにしき」(松谷みよ子作)、
 「三ねんねたろう」(大川悦生作)、「ちからたろう」(今江祥智作)、「へそもち」(渡辺
 茂男)「わらしべ長者」など昔話の読み聞かせをした。

④読み聞かせ中と後に留意した点

- 1)活字に忠実に読む：原作の言葉の美しさや響きを大切にして、作者の選んだ言葉に敬意を表し、長い話でもそのまま読む。
- 2)読後の感想を問わない：読み聞かせを聞いた子どもたちが、作品をどう受け止めるかは子どもたち自身の自由なとらえ方に任せたいと考えた。読み聞かせをすると、教室全体が開放的になる。言葉を交わさなくても、作品を介して味わえる雰囲気がある。このような教室のひとつを大切にするために、読み聞かせを行った後は感想を問わないこととした。
- 3)聞いている子どもの反応は様々でよい：子どもが、本の世界に浸っていく姿や反応の良さは、こちらが予想する以上に顕著に表れる。読み聞かせを聞きながら、本に集中して驚いたり喜んだり、不思議がったり悲しんだりする反応を抑制しない。読後に、子どもたちから感想が出た場合は、受け止めて聞き、話したいことをたくさん話させたいと考えた。

⑤子どもの変容

1)子どもの日記や作文の感想から

「めつきらもつきらどおんどん」というお話を聞きました。
 すごくおもしろかったです。もんもんびやっこに、おたからまんちん、し
 っかかもっかかだなんて、おかしくておかしくてみんなで大わらいでした。
 なわとびを、天までとどくまで、もんもんびやっここととびたいな。
 ふうわりあまいおもちの木もほしいな。かんたは、いいな。
 「ちんぷくまんぷくあっぺらこのきんぴらこ」と、言ったらあえるかもしれな
 いな。
 (6/26 K・M 日記)

ついに「あらしのよるに」のお話がおわってしまいました。
 わたしは、さいご、聞きながら聞いてしまいました。ふぶきのむこうに、なに
 があるのかな、と思いました。さいしょは、おかしくて早く読んでもらいたいく
 らいおかしかったんだけど、ガブもメイも親友だから、ふたりともだいじなんだ
 なと思いました。いま、「あるはれたひに」をかりているから、また読みたいと
 思います。
 (9/4 T・H 日記)

図書館でクリスマスの本をさがしたら、いっぱいあって、びっくりしました。
 その中で、わたしは、「サンタのおくりもの」という本ではっけんしました。
 ひょうしに、キティちゃんがあるのを、はっけんしました。本をさがすと、おもしろ
 いことがいっぱいありました。もっとクリスマスの本をさがして読みたいと
 思います。
 (12/16 M・S 短作文)

2) 子どもの様子から

子どもたちは、読み聞かせの時間を楽しみにしている。教室の前の方には、少しでも絵本に近づこうとする子どもたちでいっぱいになる。いつもぎゅうぎゅう詰めの状態である中で、椅子を置き本を持って座ると、自然と拍手がわく。

読み聞かせが始まると、おしゃべりは全く聞こえなくなる。全員の目が本に集中してくる。面白い場面では一斉に笑いが起こる。ハラハラする場面では、教室中に緊張感が流れ、ピンと張りつめた空気が漂い、子どもたちの食い入るような表情が硬くなる。

読み聞かせを聞くことで、同じ空気を共有し合っていることが伝わってくる。

読み聞かせを聞いたあとは、図書館に行って、読まれた本や同じ作者の名前の本を借りてくる子供が増えてきている。本に対する興味が高まっていることが分かる。本の題名だけでなく作者にも意識が向いてきている。

4-3 非日常的な読み聞かせの実践から

①保護者による読み聞かせの会（お話こづつみ）の実践

1) 主な目的

- ・広い視野で子どもの読書生活をとらえ、読み聞かせで子どもの心を育てていく。
- ・教室から家庭へと読み聞かせの場をを広げていく。

2) 読み聞かせの会の期日と読まれた本

ア 第1回の「お話こづつみの会」（平成16年6月30日）

- ・「おしゃべりなたまごやき」 寺村輝夫・作 和歌山静子・絵（理論社）
- ・「いぬとねこのおんがえし」 日本民話 太田大八・作（鈴木出版）
- ・「王さまと九人のきょうだい」 中国民話 君島久子・訳 赤羽末吉・絵（岩波書店）

イ 第2回の「お話こづつみの会」納涼シリーズ（平成16年7月23日）

- ・「しりっぼおばけ」 ジョアンナ・ガルドン作 ポール＝ガルドン・絵（ほるぷ出版）
- ・「ばけものつかい」 川端 誠作・絵（クレヨンハウス）
- ・「耳なし芳一」 ラフカディオ・ハーン・作（偕成社）

3) 子どもの様子

それぞれ学級の4人の保護者に協力頂いた。1週間前に学校の図書室で、本を選んだり進め方の打ち合わせ会を行ったり、会を進める準備を行った。子どもたちは大喜びだった。読み聞かせが始まると、集中して絵本に見入り、耳を傾けていた。

第2回は暑い夏の盛りで混み入った状況の中、少しずつ忍び寄ってくるしりっぼおばけに、じわじわじわじわと怖さが込み上げてきたり、落語をひと工夫した味のある絵本に聞き入ったり、時間にして20分余りの平家物語にもじっと静かに聞き入っていた。

②教科に関連した読み聞かせの実践

1) 比べ読みに使用した読み聞かせの本の例

- ・「スイミー」と「さかなはさかな」などレオ・レオニの本（6月）
- ・「ガンピーさんのドライブ」と「ガンピーさんのふなあそび」（J・バーニンガム作）（9月）
- ・「お手紙」と「おちばはき」などアーナルド・ローベルの本（10月）

2) 同じ作者の本を読み聞かせした例

・あまんきみこの本（「おにたのぼうし」、「ひつじぐものむこうに」、「お母さんの目」）

3) 子どもの様子

「お手紙」を学習した後、シリーズの作品をいくつか読み聞かせした後に「がまくんとかえるくんのような『二人の仲良しが出てくるお話』を探して読もう。」という学習課題を作った。このとき、子どもたちは、自分で本を手に取りながら探して読んだ。

このとき、「バムくんとケロくん」（島田ゆか作）や「だるまちゃん」（加古里子作）、「ぐりとぐら」（中川季枝子作）、「キャベツくんとブタヤマくん」（長新太作）、「ぞうくんとねずみくん」（森山京作）などのシリーズを目的をもって多く読み進めることができた。

4-4 読書と子どもの姿

子どもの読書経験は個人差がある。初めの頃、図鑑しか手に取らない子どもがおり、順序にページをめくりながらストーリーを追って理解するというのではなく、開いたページを単発的に映像として受け入れるという読み方をしてきた。また、絵本を飛び越えて、厚い読み物を読んでいる子どももいた。このような子どもたちに、絵本の面白さを味わわせたいと考えて読み聞かせを始めた。すると、前者のような子どもも、読み聞かせを聞くうちに、耳から入ってくるストーリー性に興味をもち、食い入るように絵や読みの声に吸い込まれていった。そして、絵本を喜んで借りるようになっていく。文字を読むという抵抗感を軽減することは、子どもに安心感を与え、意欲をもたらすことになるといえる。

5. 結語

子どもたちを巡る読書の状況、附属小児童の読書生活の実態、また読書指導の実際の事例をあげてきた。特に、読書指導の指導の実際においては、図書の選定が児童の実態に応じて細やかに行われ、計画的に指導が行われていることがわかる。また学級の保護者によるボランティアがそれを側面において支えるものとなっていることも重要である。この例に代表されるように、児童の実態に合わせ、また意図的、計画的に読書活動が展開されること、そしてなおかつ児童に読むことの楽しさを損なわないという大前提があるならば、読書指導が大きな教育効果をあげることが期待できるのである。

児童の言語生活の実態と、育てていきたい力とをどのようにバランスよくすりあわせていくか、カリキュラム全体の構想とともに、教師一人一人の指導力が求められていることを指摘しておきたい。

子どもにとって読書が日常の生活習慣の一つとして定着できるように、学校、教師、保護者、行政、図書館など「全体読書教育」whole reading education としての構想をこの研究からスタートさせたい。